

かわせみ通信

発行：神奈川県自然環境保全センター
自然保護課

住所：神奈川県厚木市七沢657

TEL：046-248-6682

野外施設自然情報

バックナンバーは
HPから見られます→

自然環境保全センターの野外施設では、それぞれの季節に、生き物同士の巧みなつながりや、興味深い生命活動など、大自然の不思議な現象にふれることができます。この「かわせみ通信」では、野外施設の出来事や生き物たちの様子を紹介しています。

野外施設トピックス (2023年9月～11月)

日付	場所	できごと
9月1日～	K15付近	マヤラン開花 雑木林の林床で3株ほど確認されました マヤランの花
9月6日	N22付近	アオダイショウがリスを丸飲みしている場面に遭遇！ X(旧Twitter)で紹介しました
10月2日	自然観察園	ザリガニバスターズ終了 のべ580人の方に参加していただき 合計2080匹のアメリカザリガニを捕獲しました
10月17日	自然観察園	ジョウビタキ確認 現在はアオジ、クロジ、ルリビタキ などの冬鳥も確認されています



<イノシシの痕跡>

10月から11月にかけて、多数のイノシシの痕跡が見られました。Y28付近の木道周辺は一面ミソソバが生育していましたが、盛んに掘り起こされ、花が咲く前にほとんどめくり取られてしまいました。イノシシは鼻先を使って植物の地下茎やミミズや昆虫などの動物を食べています。鼻先の力で数十kgの重さを動かすことができるということです。

センサーカメラでは体の大きな個体や親子連れの姿が毎晩のように撮影され、日中に来園者に目撃されることもありました。今年はクマの話題が多いですが、力が強く俊敏なイノシシも攻撃されると大変危険です。鉢合わせによる事故を防ぐため、園路に近いササやぶを一部刈り払いました。職員は朝夕に園内を巡視する際は鈴を持って歩いています。

実物と間近で対峙するのは避けたいですが、イノシシの痕跡は掘り起こし跡のほか、足跡や体について寄生虫を落とすために泥浴びをした跡（ぬた場）、泥浴び後に体を木にこすりつけた跡などがあり、園内で見られる哺乳類の痕跡のなかでも一番多いかもしれません。冬の観察対象のひとつとして、痕跡探しを試みてください。

目いっぱい体を広げてリスを
飲み込むアオダイショウ

足跡

木道付近に生えていた植物が
めくれて地面が見えている(左)泥浴び後に体を木にこす
りつけて泥を落とした跡(右)

くっつき虫いろいろ

秋、野外施設を歩いて戻ってくると、いつの間にか服や靴が草の実だらけになっていて、取るのが一苦勞ということがよくあります。服などにくっつく植物の種子、「くっつき虫」、「ひっつき虫」、その他さまざまな呼び方があるようですが、みなさんはなんと呼んでいますか？

植物は動くことができませんが、子孫を残すために、さまざまな方法で、より遠くへ種子が運ばれるように工夫しています。これを種子散布といいます。「くっつき虫」と呼ばれる草の実の種子散布は野生動物の毛に付着して移動する、動物付着散布です。実をルーペや実体顕微鏡で拡大してみると、フック状の突起や逆さのトゲがついていて、毛にしっかりとからみつけるようになっています。施設内で見つけたくっつき虫を紹介します。



布につく草の実

フック型

釣り針のような曲がった突起が毛に絡んでくっつく。面ファスナー発明のきっかけになった



キンミズヒキ(バラ科)



ミズタマソウ(アカバナ科)



ヌスビトハギ(マメ科)



ミズヒキ(タデ科)

ヘアピン型

実の付け根から出た2本の針状の小苞に動物の毛が挟まる



イノコヅチ(ヒユ科)

トゲトゲ型

逆さ向きのトゲが引っかかる



コセンダングサ(キク科)
北アメリカ原産



チカラシバ(イネ科)

ネバネバ型

実の先端に粘液を出してくっつく



チヂミザサ(イネ科)

「くっつき虫」には、オヤブジラミやヤエムグラなど、春夏に見られるものもあります。散策のあと、衣服に草の実がついていたら、観察してみてください。

最後に、植物たちは遠くへ行きたくてくっついていますが、アメリカセンダングサやオオオナモミなど繁殖力旺盛な外来種もあります。どこまでが自然の分散かを考えるのは難しいですが、拡散させないために、帰る前に服についた種子を外すという配慮も必要かもしれません。



オヤブジラミ(セリ科)



ヤエムグラ(アカネ科)

傷病鳥獣救護の情報

※救護の情報やバックナンバーは、HPで見られます。

神奈川県 野生動物救護

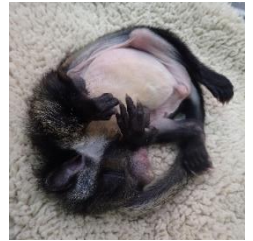
検索

自然環境保全センターでは、傷病鳥獣の救護業務として、県民の方により持ち込まれた県内の傷ついたり弱ったりした野生動物（鳥類と哺乳類の一部）を収容し、必要に応じて治療やリハビリを行い、野生に戻す業務を行っています。この「かわせみ通信」では、持ち込まれた野生動物の「救護原因」や「リハビリ状況」などの情報を掲載しています。

● 2023年7月～10月の実績 ●

受け入れ総数は、10頭羽（哺乳類2頭・鳥類8羽）でした。

救護上位種		主な救護原因(人為的要因による)			
種名	件数	鳥類	件数	哺乳類の原因	件数
ムササビ	2	ガラス窓への衝突	1	巣からの落下(疑い)	2
キジバト	2	防鳥ネットに絡む	1		
コサギ	1	ネズミ捕り(粘着剤)に絡む	1		
オオタカ	1	ムササビの赤ちゃんを受け入れました → 1頭は、残念ながら亡くなりましたが、もう1頭(左の写真)はミルクを与えながら人の手で育てています。 			
フクロウ	1				
ウグイス	1				
イソヒヨドリ	1				
		放野数			
		鳥類	0		
		哺乳類	6		



※鳥類は10月11日から受け入れ再開

新防疫体制が始動！受付場所も新しくなりました

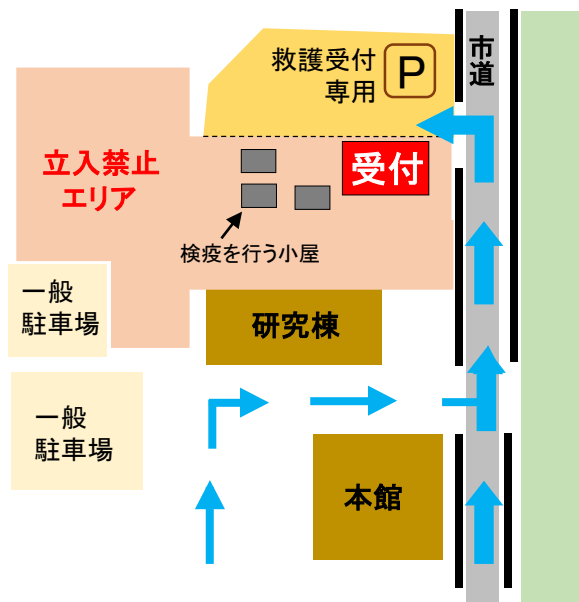
近年、高病原性鳥インフルエンザの発生が国内で多発しています。特に昨年は、9月といういつもより早い時期に神奈川県で初確認されたことから、当センターでは新たな防疫体制（検疫エリア）を整えることになりました。

施設内での鳥インフルエンザ等の感染症の拡大を防ぐため、新規で受け入れた全ての鳥類を季節を問わず、**一定期間隔離して**健康状態を観察してからリハビリを行うエリアに移します。新体制に伴い、第33号で紹介した哺乳類限定の仮設受付所も右の図のように場所を変更しました。今後も随時体制の改善を行っていきますので、急な変更があるかもしれません。引き続き、以下のお願いにご理解とご協力をお願いいたします。

この新体制を整えるために約1年間、県民の皆様、野生動物救護ボランティアの皆様、関係各位の全面協力のもと整備を進め、2023年10月11日より鳥類を含めた野生鳥獣の受け入れを再開することが出来ました。この場を持ちまして、ご協力を賜りました皆様に心より深く御礼申し上げます。

傷病鳥獣持込みの際のお願い

- ・事前に電話で相談してください。
- ・保全センターに到着したら、**傷病獣受付専用駐車場**（図右）に車を停めてください。
- ・専用駐車場以外では、**動物を車から外に降ろさないで**ください。
- ・場所など、ご不明な点はお電話ください。



受け入れを休止していた間どうしていたのか・・・新たな施設である【検疫エリア】が出来るまでをほんの一部ですが、紹介します。次のページ「受け入れ再開までの道のり……」へ→

1 整地の準備

令和4年11月中



刈払い前

10月に検疫エリアの配置を検討し、予定地が決定！
ただこの予定地は、草が生い茂っていました。



刈払い中

傷病鳥獣救護担当者全員で草刈りと枝払いを行いました。大量の草や枝を集積所に何度も運ぶのが一苦労でした。



刈払い完了

数日かけて、草刈りと枝払いが完了しました！
これで各種工事や必要な物品の発注準備を進めることができます。

2 整地完了



令和5年3月頃

水はけ良く、消毒作業もしやすいように地面をキレイに整地しました。

3 隔離小屋の設置



令和5年8月頃

小屋と小屋の間隔は環境省のマニュアルを参考に**2m以上**あけて設置しました。受け付けた鳥類を各小屋に隔離し検疫します。

4 物置を人力移動



令和5年9月頃

所内の別の場所で使われていた物置を受付用の小屋へ転用するために、若手から幹部まで力自慢の職員で台車に乗せて運びました！

5 受け入れ再開



令和5年10月

④の物置を検疫エリア内に移動して、受付所にしました。左の写真は、実際に鳥を受け入れている時の様子です。

持ち込み者は検疫エリアの外から動物を渡すことで、検疫エリア内に立ち入らなくても良いように工夫しています。

おまけ

ここでは紹介できませんでしたが、普段は野生動物の治療や世話ばかりしている職員が電気工事など慣れない発注業務を行いながら、毎日のように傷病鳥獣救護の新体制について参考資料を探して読み、悩み、語り合い、議論を重ねた貴重な1年となりました。

鳥類再開後
最初に来た鳥は?!

オオタカを受け入れました

令和5年10月11日に真鶴町から左翼の上腕骨骨折と重度に痩せた状態で持ち込まれました。

鳥類の上腕骨の骨はストローのように中が空洞になっているので、骨の中に針金を入れて固定し、さらに羽の上からテーピングをして骨折した骨がくっつくように処置を施しました。現在は、エサをもりもり食べて体重も増え、治療とリハビリを行っています。



持ち込まれた時の様子



骨折の治療をした後の様子